



きつね味

NO.1F
project

Vol.6

森の中にぽつんとアイスクリームスタンドがあった。私と恋人は歩き疲れていたから、アイスクリームは魅力的だ。

「バニラアイスを下さい」と言うと、赤いキャップの若者はちょっと困った顔をして

「きつね味しかないのです」

と言った。

きつね味？ 私と恋人は顔を見合せたけれど、私たちはとても疲れていたから、どうしても甘い物が食べたかった。

「きつね味ってどんな味なのかしら」

「きつね味のアイスクリームだから、きつねの味です」

「おいしいの？」

「そりゃあ、もう、とつても！」

「それじゃ、きつね味を二つ下さい」

赤いキャップの若者はとても嬉しそうな顔で、コーンからはみ出しそうなくらいにきつね色のアイスクリームを盛りつけた。

きつね味のアイスクリームがきつねの味かどうかはよくわからない。だって、きつねを食べたことがないんだもの。

その後も森を歩き続けたのだけれど、きつねを見掛ける度に恋人が「ちょっと味見してみる？」と言うので、段々その気になってきた。きつね味のアイスクリームは、そりゃあ、もう、とつてもおいしかったから、きっと生のきつねはもっとおいしいと思うのだ。

類い稀なる美人だった姉やは、負った火傷で皮膚は引き攣れ髪はほうほうと抜け落ち、赤黒い顔に血膿の浮いたさまは鬼とまで蔑まれるようになった。ひと月生死をさまよった。

家屋が焼けたのは姉やに懸想していた誰ぞの放った火が原因だったらしいと聞いた。どんな恋情を打ち明けられても、姉やはすべてを袖にした。火の手から逃げ遅れた私に気づいて引き返してきた姉やはほとんど火達磨だった。

以来、私は毎夜姉やの部屋を訪れる。姉やは寝間着を脱いで全裸になって待っている。私は姉やの引き攣れた皮膚や爛れた乳房を丹念にねぶってゆく。滲む血膿を口いっぱい溜めながら、甘い甘いと繰り返す。姉や姉や。美しい姉や。姉やの傷はどれほどにも甘いから、私はどんなにでもしゃぶることが出来るんだよ。心の臓が打っていなかったとしても問題ではないんだよ。

私は、姉やから滲み出す血膿をすべて舐め取り、その下に以前と違わぬ透きとおる白い肌が現れるのを夢想する。甘い甘いと繰り返す。

恐竜図鑑を抱えて眠る時、私は一匹の深海魚になったような心地になる。柔らかい毛布が私を包み、視界は閉ざされ、自分の心音しかせず、自分の呼気のおいしかしない。唯一、ままだに動けるのが舌である。舌である私はぬらりと口蓋を抜け出し、胸に抱いた本の背表紙に沿って泳ぎ下る。深海魚もきっと、こんな真っ暗な海を泳ぐのだろうと思いながら。

恐竜図鑑は両手で抱える程度の大きさであるが、舌である私にとってそれは校庭くらい広く感じるものだ。どこから読み始めれば良いものか。しかし迷う間もなく紙面に触れた傍から物語は始まっているのだ。私は空気を泳ぐ透明な魚になって、隕石が降り注ぎ火山が火を吹く様を見下ろしている。恐竜どもが群れを成して逃げ惑う。やがて彼らが死に絶え化石になるまで、私は時間の海を、ゆらりゆらりと泳いでいる。

「あなたの舌のざらざらしたのが具合がいいの」と小さな僕の彼女が言うので、僕は彼女を自分の口のなかに住ませることにした。これも同棲というのだろうか？ 彼女の冷たい裸足や柔らかな手のひらが粘膜のあちこちに触れるのは気持ちがよかったし、何より彼女が僕の舌を使って遊ぶ様子を感じ取れるのがよかった。「あ、あ、あ、」と彼女は息を漏らす。

僕は食事のとき彼女を噛み砕いたり呑み込んだりしてしまわないよう細心の注意を払っていたし、彼女も僕の口のなかを動き回るのはお手のものだった。彼女は僕が口にしたものをひとかけらずつ千切って食事に使っていた。「そんなものでおなかは満たされるの？」と僕が訊くと、「問題ないよ」と彼女は笑った。なかでもチョコレートは大好物だったので、僕は毎日彼女のためにチョコレートを食べた。僕たちはうまくやっていたと思う。

痛みは突然やってきた。

朝起きると左の奥歯に激痛が走り、頬に触れてみると腫れて熱を帯びていた。どうにも我慢が出来ずに、彼女には舌の下に隠れてもらって歯医者に行くと、「見事な虫歯ですね」との診断。

「甘いものばかり食べているからよ」とチョコレートのにおいの香る口で彼女は言った。しかし実のところ僕は毎日食べているチョコレートの味を知らない。何より夜中、夢うつつのなか耳にする、歯ぎしりとは異なるしよりしよりという音の説明がどうしてもつかない。

夕べの餐に肉叉を交え／立花腑楽

「一枚は、あなたとお喋りするため。もう一枚は、あなたとこうして素敵なディナーを楽しむため――」

極上のフィレ肉の塊を頬張りながら、陶然とした表情を浮かべる。

白い歯の隙間から、肉の脂にまみれた薄桃色の蛭が、びよこびよこびよこびよこと、浅ましく蠢いているのが見えた。

「あたしってマルチタスクなの」

自称二枚舌の彼女だが、本当のところ、何枚の舌を隠し持っているのか、僕にはとんと、見当がつかない。

「お菓子が食べたい」

病気のために満足にもものも食べることを許されない君の願いを、どうして無碍にできるものか。どうせ死ぬなら最後は好きなことを好きなように好きなだけやってみればいいのだ。細い足にぶかぶかのスニーカーを履かせ、僕たちは夜勤の看護師たちの目を盗んで外へ出た。

夜行バスに乗って辿り着いたのは海辺の知らない街。白亜の壁が海岸沿いに並ぶ町並みはまるで異国のようだった。

通りを歩いて目に付いた洋菓子店に入ってはショーケースに並んだ宝石みたいなお菓子を右から左まで全部買い占める。デパートなんてすごく大変だった。

買ったお菓子は全てホテルに運んだ。テーブルやベッドに並べ、バスタブにも並べ、それでも場所が足りないから床に並べ、しまいには足の踏み場もなくなった。

すっかり日が暮れる頃には君が満足できるだけの量が集まったらしい。頬に手を当て「どれから食べよう」なんてうっとりしている。好きなだけ食べるといい。ショートケーキ、シュークリーム、羊羹、板チョコ、タルトにマカロン。

君は恐る恐るケーキのイチゴを口に運んだ。じっくり味わう。咀嚼されたイチゴが細い喉を下る様子がよく見えた。プラスチックのフォークをスポンジに刺し、口に運ぶ。今にも泣きだしそうな顔で味わっている。次の一口へ。やがて君はフォークを使うのがもどかしくなり手づかみでお菓子を頬張るようになる。胸焼けを起こして戻しても、君は手を止めない。

僕は病院に電話をする。携帯電話を折り畳んで仕舞ったとき、君はお菓子の海の真ん中で背中を丸めていた

海賊たちを、褐色の薄い布を纏った踊り子たちが飲ばせる。
逞しい腕に絡みつく魅惑の芳香、やわらかく噛めば甘く弾ける。
ほんの僅かに酸味が感じられるならば、それはかつて瑞々しい果実だった頃の名残だろう。

海賊たちよ、踊り子が気に入ったかい？
握手をしよう。同盟だ。調印は必要ない。

踊り子たちよ、踊りはもう仕舞いだ。タルトやアイスクリームのベッドで眠りなさい。

臨終間際の祖父が、飴を舐めたいと言い出した。

度重なる延命措置で切り刻まれた彼の胃袋は、他の臓器同様、とうの昔に本来の機能を停止している。

「儂は死ぬ。肉だ刺身だ、今更、そんなややこしいものは要らん。ただ、せめてもう一度、甘い飴を舐めてみたい」

幽鬼のように落ち窪んだ眼を剥きながら、喘ぎ喘ぎ、そう哀願してくるのだ。達者なころは、身代を潰さんほどに食道楽に傾倒した祖父であるだけに、危篤の床に参集した親類一同、その一言に特段の重みを感じた。

父が、よろしいでしょうか、と問う。

お医者様は、やむを得ないという表情で、お祖父様とご家族の御心のままに、と応えた。

その時、祖父の枕頭で置物のように微動だにしなかった祖母が立ち上がった。部屋の隅の茶箆箆を曳き開けて、何やらごそごそし始める。場に集まった人全てが、きっと彼女は伴侶の最期の望みを叶えるべく、適当な飴玉でも探しているに違いないのだと思った。

果たして、祖母は祖父の枕元に戻り、痰に塗れた彼の口に何かを押し込んだ。途端に、祖父の顔面から暗い死の陰が去り、代わりに口福の相が満面に現れる。

「おう、甘露」

祖父はそう言って、二度三度、口をもごもごさせると、それっきり、静かに活動を停止した。

お医者様が脈を取り、お定まりの如く「ご臨終です」と言ったのを聞いて、座の緊張感がすつと引いた。わっと泣き出す者はいない。ただ、誰しもが、一族の最長老が逝ったことに対して、静かで淡々として、それでいて強い感慨を抱いているようだった。お医者様と看護婦が整整と事後処理をしている他、遺族は誰も彼も、一種の無気力状態に陥っている。

そんな中、頑なに表情で祖父の臨終を見守っていた祖母が、すつと仏の口元に手を伸ばす。それは、白けた雰囲気の間隙を縫うような、自然でしたたかな動きだった。

祖母の指が、抜け目のない素早さで、祖父の口中から何かを引き出す。それは、白金に輝くリングで、死者の唾液でぬらぬら濡れていた。彼女はそれを懐紙に包むなり、素早く着物の袂に押し込んだ。

祖母の顔には、何かしら釈然としないような、戸惑っているような、言いようもなく不安定で危うげな表情が浮かんでいる。大往生を遂げた祖父の安らかな死に顔とは、まるで対照的だなどと、僕は思った。

きつね味

<http://p.booklog.jp/book/45508>

著者 : NOIFproject

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/noifproj/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45508>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/45508>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.